

# 受験者のライティング問題の捉え方とその対策 —日本の大学入学試験環境における波及効果—

How Writing Tests Interpreted and Prepared for? : Washback Effect  
in the Context of Japanese University Entrance Examinations

木幡 隆宏

Takahiro KOWATA

東京外国語大学大学院博士後期課程

*Tokyo University of Foreign Studies*

*The Doctor's Program of the Graduate School*

## Abstract

The present study focused on the washback effect of writing tests in the context of Japanese university entrance examinations on learning. In order to explore the washback effect, 214 university and college students were asked by questionnaire how they felt about the abilities required for the four types of writing tests (written composition, summarization, translation and reordering) and the effective methods to prepare for them. Ten students were interviewed on how they prepared for their own entrance examinations in interviews. The data from the questionnaires was analyzed by ANOVA followed by Bonferroni's post hoc test. As a result, the participants believed different abilities were needed and different methods were effective for each type of writing test. However, they tended to follow their teachers' advice rather than deciding how to prepare for their entrance examinations by themselves. Thus, teachers are possibly a key factor for the washback effect in writing tests on learning.

## Keywords

Washback Effect, Writing, Test, University Entrance Examination

### 1. はじめに

日本の大学に入学するためには、統一されたすべての大学入学のための試験はなく、各大学の入学試験を受け、それに合格しなければならない。日本の大学入学試験制度は非常に複雑であり、筆記試験が中心の一般入試の他に、推薦入試やAO(アドミッション・オーフィス)入試など複数の方式が存在する。多くの大学入学希望者が受験する一般入試の筆記試験は、各大学によって試験教科が異なるばかりでなく、試験問題の特徴も異なる。

それに対応する教師は受験大学が異なる生徒を抱えており、授業で生徒全員の大学入学試験に細かく対応することは難しい。そこで受験者は、それぞれが受験する大学入学試験を各自で分析し、その対策を行わなければならない。特に、多くの大学受験者が受ける

センター試験では扱われていないライティング問題に関しては、その対策方法は受験者が決断する部分が多くなると考えられる。本研究では、大学進学希望者の多くが受けるセンター試験(平成20年度は504,387名が受験)<sup>1)</sup>では扱われていないライティング問題に焦点を当て、大学入学試験が学習へ及ぼす波及効果について調査する。

## 2. 先行研究

現在まで、様々な言語テストの波及効果研究が行われてきているが、テストの波及効果はコンテキストに依存する部分があり(Cheng and Curtis, 2003), その研究結果の解釈もコンテキストの要因を考慮にいれる必要がある(Watanabe, 1996)と言われている。したがって、ある研究である波及効果が確認されたとしても、その結果が他のテスト、他の環境にもあてはまるとは限らず、それぞれのテスト、それぞれの環境での研究が必要である。

Baily(1996)はそれまでの研究をまとめ、波及効果のモデルを示している(図を参照)。このモデルでは、テストが学習者、教師、教材やカリキュラム開発者、研究者に影響を与え、それらが直接または間接的に学習や教授、教材やカリキュラムに影響を与えるということを示している。「学習(learning)」に注目すると、「学習」は学習の行為者である「生徒(students)」と「教授(teaching)」、「新しい教材とカリキュラム(new materials and new curricula)」から影響を受けている。その中でも、生徒自身の考えが最も学習に影響を与えており、その生徒自身はテストから影響を受けている。つまり、テストが生徒というフィルターを通して学習に大きな影響を与えていていると考えられる。ということは、テストの学習への影響は、生徒がテストをどのように捉えているかによって変わるものではないだろうか。

テストで一番重要なことはその妥当性、つまり測定したい能力を的確に測定しているかということである。では、ライティングテストで測定したい能力とは何か。Grabe & Kaplan(1996)は、ライティングに関する技能、知識、プロセスを細かく分類しており、知識に関するものとして言語的知識(linguistic knowledge)、談話的知識(discourse knowledge)、社会言語的知識(sociolinguistic knowledge)の3種類を提示するとともに、その下位項目についても細かく分類している。それらの項目がライティングテストで測定する能力の候補となるのだが、実際に測定しているのはその一部であり、問題の種類、採点基準によって異なる。

ライティング能力の測定形式として、トピックや状況が提示され英語で文章を書く自由作文や、日本語を英語に直す和文英訳などが挙げられる。この2種類の問題は形式が異なるだけでなく、測定している能力も異なっている。自由作文では、ある程度まとまった文章を書くことを求められるため、受験者は前後の関係に注意しながら一貫した文章を書かなければならない。しかし、和文英訳は与えられた1文1文を英語に翻訳するものであり、1文だけ与えられる場合が多く、複数の文を与えられたとしても、受験者は構成や内容の一貫性について考えずに書くことになる。

ライティングテストの採点は、通常採点基準を設定し、それに沿って採点が行われる。そして、その採点基準の作成には、測定したい能力を決定するということが必要である。測定したい能力は採点基準の作成者によって異なるが、それは、採点基準によって測定される能力が異なるということを意味する。TOEFL®のTWE(Test of Written English) や

Michigan Writing Assessment Scoring Guide, ESL Composition Profile (Jacobs, et al., 1981)などの採点基準が異なるのは、それぞれで測定したい能力が違うということを意味しているのである。

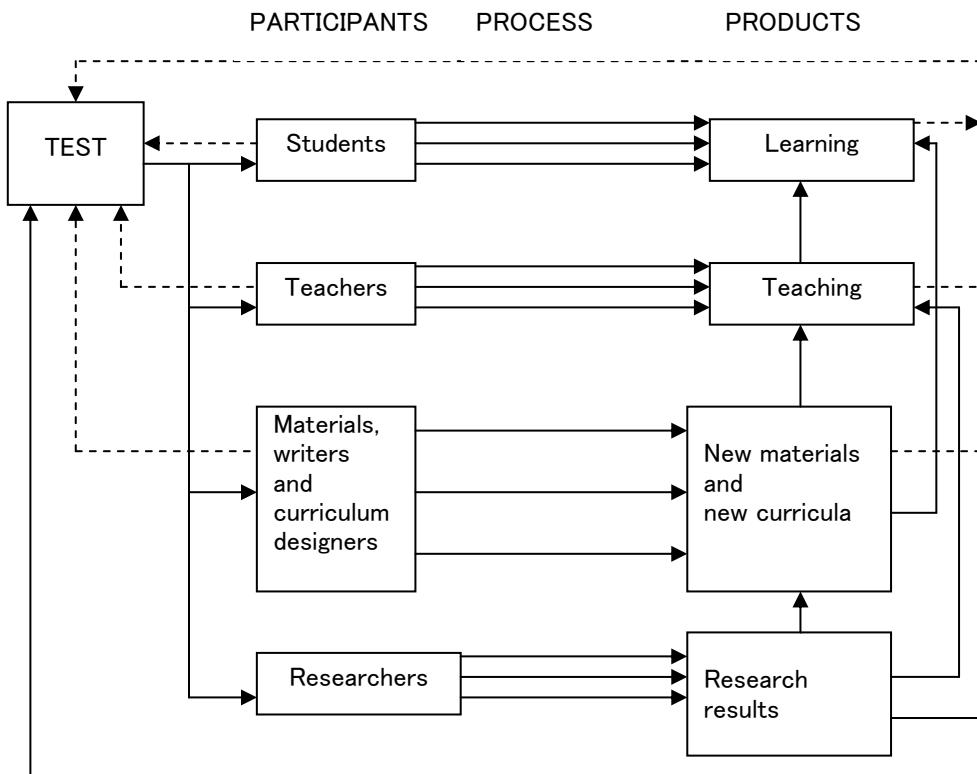


図 波及効果の基礎モデル (Baily, 1996 より引用)

そこで、日本の大学入学試験のライティング問題の形式と採点基準を調査することによって、その測定している能力が推測できると考えられる。しかし、問題形式は公開されているが採点基準は公開されていない。採点基準から測定されている能力を推測することができないため、受験者は、採点基準なしでライティング問題の問題文のみを情報に、測定されている能力を分析しなければならない。したがって、本研究では、ライティング問題の形式に焦点を当て、大学入学試験経験者にとって、ライティング問題はどのような能力が重要であり、どのような対策が有効であると考えられているかを調査することにより、日本の大学入学試験の英語科目におけるライティング問題の波及効果を探る。

### 3. 研究の目的

本研究では、日本の大学入試英語科目におけるライティング問題の学習に与える波及効果を明らかにすることを目的とし、以下の2点のリサーチクエスチョンを設定した。

- 1 学習者はライティング問題(自由作文, 要約, 和文英訳, 並べ替え)の解答にはどのような能力が重要であると考えているか。
- 2 学習者はライティング問題(自由作文, 要約, 和文英訳, 並べ替え)の対策としてどのような方法が有効であると考えているか。

## 4. 手順

### 4.1 参加者

4年制大学および短期大学の新入生 214 名(最終的には 204 名。大学 A:68 名, 大学 B:74 名, 短大 C:24 名, 大学 D:38 名)を対象に調査を実施した。大学入学試験の波及効果を調査するためには、本来は受験生を調査対象にすべきであるが、受験前の貴重な時間を本研究のために割いてもらうことは困難である。そこで、大学受験を経験し、それからあまり時間が経過していない大学および短大の新入生が本研究の参加者として適当であると判断した。

### 4.2 方法

214 名の学生にアンケート(有効回答数は 204)を、その中の 10 名(大学 A:6名, 大学 D:4名)にインタビューを実施した。

#### 4.2.1 アンケート

アンケートを使用して、4種類のライティング問題(自由作文, 要約, 和文英訳, 並べ替え)を対象に、(a)各ライティング問題を解くためにはどのような能力が重要であると考えているか、に加え(b)各ライティング問題に対してどのような対策方法が有効であると考えているか、について調査した。

対象となったライティング問題については、日本の大学入学試験で扱われているという理由から上記の4種類を選択した。並べ替え問題については、ライティング問題ではないという議論もあるかもしれないが、ライティングの下位能力を測定していると考えられることと、高校のライティングの教科書の中で扱われていることから今回の調査に含めることとした。

ライティング問題に解答するためにはどのような能力が重要だと考えているかについて、ESL Composition Profile (Jacobs, *et al.*, 1981) の観点である内容(content), 構成(organization), 語彙(vocabulary), 言語使用(language use), 機械的技能(mechanics)の5項目をそれぞれ5件法(全く必要でない～とても必要だ)で質問した。また、アンケートには5項目のうち、内容と言語使用、機械的技能については簡単な説明も加えた。Grabe and Kaplan (1996)の分類は、かなり細かく分類されているという点と、結束性(cohesion)や一貫性(coherence)など、参加者にとって理解や区別が難しい項目が多く含まれる点から本研究には適さないと判断した。全体的採点基準を採用している TOEFL® TWE Scoring Guide と Michigan Writing Assessment Scoring Guide などに記述してある能力を抜き出した場合も、同様の理由で本研究の参加者には適さないと判断した。ESL Composition Profile はライティング能力の主な部分を包括しており、参加者が理解できると思われる項目であることから選択された。

ライティング問題対策としてどのような方法が有効であると考えているかについては、語彙、文法、和文英訳など 12 項目(表1)について、各問題の対策として有効であると思うかどうかについて5件法(全く有効でない～とても有効だ)で質問した。項目の作成の際には、大学生と大学院生に、過去に自身が行った受験対策についてインタビューを実施し、参考にした。質問項目の中に「自由英作」が4種類あるが、「答え参考」は、問題集や参考書の答えや解説に書いてあることを参考に学習すること、「日教師添削」は日本人の英語教師に添削してもらうこと、「ALT 教師添削」は ALT(Assistant Language Teacher)または英語を母語とする教師に添削してもらうこと、「その他添削」は家族や親戚など前述の3種類以外の人に添削してもらうことを意味している。また、「英 R 同トピック」とは、問題と同じトピックの英語の文章を読むことを意味し、「英 R 異トピック」とは、問題のトピックとは関係のない内容の英語の文章を読むことを意味する。同様に、「日 R 同トピック」とは、問題と同じトピックの日本語の文章を読むことを、「日 R 異トピック」とは、問題のトピックとは関係のない内容の日本語の文章を読むことを意味する。このインタビューに参加してくれた学生によると、ライティング問題対策のために英語や日本語の文章を読んだのは、そこから英語の表現や文章構成を学んだり、書く内容の助けとなるものを得たりするためということであった。

また、参加者が4種類のライティング問題をイメージしやすくするために、問題例として 2006 年度の大学入学試験問題(旺文社, 2007a・2007b)よりそれぞれの問題の典型例であると思われる問題を提示した。その例には、自由作文が早稲田大学国際教養学部、要約が東京外国语大学前期日程、和文英訳が京都大学前期日程、並べ替えは立命館大学 2 月 1 日実施の問題を使用した。

表1 ライティング問題対策方法

語彙
イディオム
文法
和文英訳
自由英作(答え参考)
自由英作(日教師添削)
自由英作(ALT教師添削)
自由英作(その他添削)
英R同トピック
英R異トピック
日R同トピック
日R異トピック

#### 4.2.2 インタビュー

アンケートの参加者の中から 10 名(大学 A:6名、大学 D:4名)にインタビューを実施し、主に(a)ライティング問題と関係のある能力、(b)入試の対策方法、(c)入試の対策方法はどのように決めたか(学校や塾、予備校の先生のアドバイスに従うか、本を参考にするか、独自の方法か、など)の3点について中心に質問した。

### 4.3 分析

まず、学習者が異なるライティング問題の解答にどのような能力が必要であると考えているかを調べるために、二元配置分散分析を行い、その後 Bonferroni の方法による多重比較を行った。独立変数はライティング問題の種類と能力であり、ここでは前者は4種類、後者は5種類存在するため、 $4 \times 5$ の二元配置分散分析となる。この分析により、学習者がライティング問題の種類によってどの能力が重要であると考えているかが推定できる。

同様に、学習者が異なるライティング問題の対策としてどのような方法が有効であると考えているかを調べるために、二元配置分散分析を行い、その後 Bonferroni の方法による多重比較を行った。独立変数はライティング問題の種類と対策方法であり、ここでは前者は4種類、後者は12種類存在するため、 $4 \times 12$ の二元配置分散分析となる。この分析により、学習者がライティング問題の種類によってどの対策方法が有効であると考えているかが推定できる。なお、全ての検定において有意水準を5%と設定した。

## 5. 結果と考察

### 5.1 重要であると考える能力について

表2は、ライティング問題を解くために重要であると考える能力についてのアンケート結果を記述統計で示している。また、表3は、ライティング問題と重要であると考える能力に関する Mauchly の球面性の検定と分散分析の結果を示している。なお、ライティング問題と能力による主効果、ライティング問題と能力による交互作用とともに Mauchly の球面性の検定の結果、球面性が仮定されなかったため、Greenhouse-Geisser による自由度の修正をして分散分析を行った。その結果、相互作用は有意であることがわかった( $F_{(8,24)}=66.227$ )。表4は、その後の多重比較の結果を示しており、「=」は有意な差がないことを、「>」は有意に左辺の数値が高かったことを意味する。

まず、各能力において重要視されているライティング問題がどのように異なっているかに注目する。自由作文と要約には似た結果が出ており、内容に関する能力についてのみ自由作文の方が重要であると考えられているが、他は有意な差がなかった。これは、ふたつの問題の最終的なプロダクトは、見た目は同じであるが、自由作文の方は自ら書く内容を作り出さなければならないからであろう。並べ替えは、言語使用能力は重要であるが、他の能力は他の問題と比較してあまり重要でないと考えられていることがわかった。これは並べ替えが唯一組み合わせの選択式解答であり、文法的正確さを満たしてさえいれば正答できる問題であるということが大きな理由ではないだろうか。さらに、機械的技能が並べ替えで重要視されていなかったことも同じ理由からだと思われる。

次に、各ライティング問題において、重要視されている能力がどのように異なっているかに注目する。特に目立った結果が言語使用と内容に見られ、参加者はすべての問題において言語使用能力が最も重要であり、内容に関する能力が最も重要でないと考えている。また、機械的技能は内容に次いで重要視されていないことがわかった。他の特徴として、並べ替えでは言語使用を、和文英訳ではそれに加え語彙を、自由作文と要約ではさらに文章構成の能力が重要視されていることが挙げられる。

以上を踏まえると、学習者はライティング問題によって重要であると考える能力に違いが

あることがわかる。つまり、学習者はライティング問題の特徴を捉え、それぞれに重要な能力を認識している。

表2 ライティング問題を解くために重要であると考える能力

能力	自由作文		要約		和文英訳		並べ替え	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
内容	3.33	1.06	2.98	1.12	2.31	1.02	1.84	0.97
文章構成	3.97	0.82	4.06	0.92	3.54	1.17	3.42	1.42
語彙	3.92	0.94	4.07	0.90	4.36	0.77	3.32	1.17
言語使用	4.10	0.84	4.16	0.84	4.45	0.70	4.59	0.71
機械的技能	3.66	1.02	3.76	1.01	3.88	0.98	2.25	1.18

表3 ライティング問題と重要であると考える能力に関する  
Mauchly の球面性の検定と分散分析の結果

	Mauchlyの球面性検定			分散分析		
	df	Mauchly's W	p	df	F	p
ライティング問題	5	.518	.000	205	118.877	.000
能力	9	.634	.000	3.31	226.867	.000
ライティング問題×能力	77	.065	.000	8.24	66.227	.000

\* 分散分析の結果は Greenhouse-Geisser による自由度の修正を行った後のものである。

表4 ライティング問題と重要であると考える能力に関する多重比較の結果

独立変数	下位項目	多重比較
能力	内容	自由作文>要約>和文英訳>並べ替え
	文章構成	自由作文=要約>和文英訳=並べ替え
	語彙	和文英訳>自由作文=要約>並べ替え
	言語使用	和文英訳=並べ替え>自由作文=要約
ライティング 問題	機械的技能	和文英訳=要約=自由作文>並べ替え *但し、和文英訳>自由作文
	自由作文	言語使用=文章構成=語彙>機械的技能>内容
	要約	言語使用=語彙=文章構成>機械的技能>内容
	和文英訳	言語使用=語彙>機械的技能>文章構成>内容
	並べ替え	言語使用>文章構成=語彙>機械的技能>内容

\* 「>」は 5% 水準で有意な差があることを、「=」は有意な差がないことを示す。

## 5.2 有効であると考える対策方法について

表5は、ライティング問題を解くために重要であると考えている能力と、ライティング問題を解くために有効であると考えている対策方法についてのアンケート結果を、記述統計で示している。表6はライティング問題と有効であると考える対策方法に関する Mauchly の球面性の検定と、分散分析の結果を示している。ここでも前節と同様に、主効果、交互作用とともに Mauchly の球面性を検定した結果、球面性が仮定されなかったため、Greenhouse-Geisser による自由度の修正をして分散分析を行った。その結果、相互作用は有意であることがわかった( $F(17.498)=23.155$ )。また、表7はその後の多重比較の結果を示している。

表5 ライティング問題対策として有効であると考える方法

対策方法	自由作文		要約		和文英訳		並べ替え	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
語彙	3.96	1.02	4.31	0.82	4.46	0.79	3.52	1.16
イディオム	3.86	0.98	4.12	0.90	4.30	0.88	4.22	0.94
文法	4.11	0.85	4.26	0.85	4.42	0.80	4.54	0.76
和文英訳	3.39	1.16	4.10	1.01	4.54	0.77	3.15	1.15
自由英作(答え参考)	3.27	1.16	3.37	1.14	3.48	1.13	2.84	1.18
自由英作(日教師添削)	4.01	0.96	3.99	0.99	4.04	0.93	2.92	1.11
自由英作(ALT教師添削)	3.98	1.06	3.92	1.08	3.95	1.04	2.85	1.13
自由英作(その他添削)	3.23	1.17	3.26	1.14	3.32	1.14	2.54	1.01
英R同トピック	3.36	1.11	3.44	1.07	3.33	1.09	2.75	1.16
英R異トピック	3.50	1.08	3.41	1.07	3.28	1.12	2.83	1.17
日R同トピック	2.89	1.05	2.99	1.05	2.69	1.16	2.17	1.02
日R異トピック	2.46	1.07	2.74	1.18	2.48	1.12	2.05	1.02

表6 ライティング問題と有効であると考える対策方法に関する

Mauchly の球面性の検定と分散分析の結果

	Mauchlyの球面性検定			分散分析		
	df	Mauchly's W	p	df	F	p
ライティング問題	5	.621	.000	2.283	248.639	.000
対策方法	65	.014	.000	6.152	458.482	.000
ライティング問題×対策方法	560	.000	.000	17.498	23.155	.000

\* 分散分析の結果は Greenhouse-Geisser による自由度の修正を行った後のものである。

表7 ライティング問題と有効であると考える対策方法に関する多重比較の結果

対策方法	独立変数	下位項目		多重比較	
		語彙	和文英訳>要約>自由作文>並べ替え	イディオム	和文英訳=並べ替え=要約>自由作文
	文法	並べ替え=和文英訳>要約=自由作文			
	和文英訳	和文英訳>要約>自由作文>並べ替え			
	英作(答え)	和文英訳=要約=自由作文>並べ替え *但し、和文英訳>自由作文			
	英作(日教師)	和文英訳=自由作文>要約>並べ替え			
	英作(ALT)	和文英訳=要約=自由作文>並べ替え			
	英作(その他)	和文英訳=要約=自由作文>並べ替え			
	英R同トピック	要約=自由作文>和文英訳>並べ替え			
	英R異トピック	自由作文>要約=和文英訳>並べ替え *但し、自由作文>和文英訳			
	日R同トピック	要約=自由作文>和文英訳>並べ替え *但し、要約>和文英訳			
	日R異トピック	要約>和文英訳=自由作文>並べ替え			
ライティング 問題	自由作文	文法=英作(日教師)=英作(ALT)=語彙=イディオム>英R異トピック=和文英訳=英R同トピック=英作(答え)=英作(その他)=日R同トピック>日R異トピック *但し、文法>イディオム、英R異トピック>日R同トピック			
	要約	語彙=文法=イディオム=和文英訳=英作(日教師)=英作(ALT)>英R同トピック=英R異トピック=英作(答え)=英作(その他)=日R同トピック>日R異トピック *但し、語彙>イディオム、文法>英作(ALT)、英R同トピック>日R同トピック			
	和文英訳	和文英訳=語彙=文法=イディオム>英作(日教師)=英作(ALT)>英作(答え)=英R同トピック=英作(その他)=英R同トピック>日R同トピック>日R異トピック *但し、和文英訳>イディオム			
	並べ替え	文法>イディオム>語彙=和文英訳=英作(日教師)=英作(ALT)=英作(答え)=英R異トピック=英R同トピック=英作(その他)>日R同トピック>日R異トピック *但し、語彙>英作(日教師)、和文英訳>英R同トピック、英作(日教師)>英作(その他)、英作(ALT)>英作(その他)、英作(答え)>英作(その他)			

\* 「&gt;」は 5% 水準で有意な差があることを、「=」は有意な差がないことを示す。

まず、各対策において重要視されているライティング問題がどのように異なっているかについて注目する。特に目立った問題は並べ替えで、イディオムと文法を除いてすべての方法が他の問題より有効でない対策と考えられている。この点は、語句の順番の正確さが正否を分けるという問題の特徴からも容易に想像できる。次に、和文英訳対策方法としての和文英訳が、要約や自由作文よりも和文英訳の問題に対して重要であるという考えは当然であると思われるが、この3種類の問題に対して自由作文を書くという対策が、どの添削者でも同じくらい重要であると考えられていることは驚きであった。これは、アンケート調査では有効だと考える対策方法について質問したために、参加者が自由作文を書けば和文英訳問題の対策にもなると考えたからかもしれない。和文英訳問題対策だけのために内容も構成も考慮に入れて長い英語の文章を書くということは想像しにくい。また、英語の文章を読むという対策方法は自由作文、要約、和文英訳問題に対して同じくらい重要であると考えられていた。参加者は、文単位の表現や文章の構成などを、英語を読むことによって参考にしようとするのではないだろうか。そして、要約問題対策として日本語の文章を読むという対策が重要視されている傾向にあるが、これは問題に含まれる日本語を正確に理解する必要があるからだと思われる。

続いて、各ライティング問題において重要視されている対策方法が、どのように異なっているかに注目する。自由作文と要約、和文英訳の問題には大きな共通点が見られる。それは、語彙とイディオム、文法を学習することがより有効であると考えられている点である。さらに、自由作文と要約では日本人教師、ALT または英語を母語とする教師に作文を添削してもらうことが有効であると考えられている。学習者は、文法や語彙、イディオムを学習することによって1文レベルの英語を書くための能力を伸ばそうとしているのではないだろうか。それに加えて、文章レベルの英語を書くために、模範となる問題集の解答例や実際に使用されている本や新聞、雑誌などの英語を参考にするというよりは、自分で英語の文章を書いて学校の先生にアドバイスをもらうという方法が有効であると考えていると思われる。また、上でも述べた様に、並べ替え問題では文法とイディオムを学習することが重要視されており、他の問題とは特徴が大きく異なることもわかった。

### 5.3 インタビューからわかったことについて

ここでは、10名の参加者から得たインタビュー内容からわかったことについて言及する。まず、ライティング問題と関係のある能力について、アンケートに回答するまで考えたことがなかったという意見が多く、入試対策の勉強方法については学校や塾、予備校の教師の助言に従うという参加者がほとんどだった。また、少数ではあるが教師の助言を参考に自分に合った方法を選択するという意見もあった。これらのことから、学習者はライティング問題に必要な能力を考えてその対策をしているというよりは、(無意識的に必要な能力を考えているかもしれないが)教師の助言に従って入試のライティング問題対策をする傾向があるということがわかる。大学入試のライティング問題波及効果について考えると、その対策としての学習については、試験問題から生徒を通して及ぼす影響よりも、教師の助言を通して及ぼす影響の方が強いのではないだろうか。

## 6. まとめ

本研究の調査から、学習者はライティング問題(自由作文、要約、和文英訳、並べ替え)の特徴をつかみ、問題によって異なる能力が重要であると考えていることがわかった。また、全体的に文法、語彙、イディオムの学習が重要視される傾向があるものの、問題によって異なる対策が重要であると考えられていることがわかった。しかし、自由作文と要約では教師にライティングの添削を求め、入学試験対策方法を教師の助言によって決定する傾向があることから、学習者は教師の指導や助言を通して大学入試のライティング問題の波及効果を受けている部分が大きいと考えられる。

## 7. 本研究の限界

受験者は大学受験に際して複数の大学を受験するために色々な大学の問題対策をしており、それと一緒にライティング以外の問題の対策をしている。そのため、ひとつの対策方法が、ライティング問題の影響を受けた対策であったかどうかを判断するのは難しい。本研究では、実際に参加者がどの問題のためにどのような対策をしたか質問することができず、どのように捉え、対策するのがよいと考えているかについて調査した。そのため、実際参加者の回答が行動と一致するかという点について不安が残る。その問題点を解決するためにインタビュー調査を実施したが、参加者が少なかったため十分に解決できなかった。また、調査への参加者が大学に入学した学生のみであり、入学できなかった受験者について調査していないため、サンプルに偏りがある可能性があることも問題点のひとつとして挙げられる。

## 謝辞

アンケートとインタビュー調査にご協力していただいた大学生や大学院生のみなさまに感謝申し上げます。また、調査を実施するにあたりご協力いただいた桐生直幸先生、工藤洋路先生、坂本光代先生、佐々木雅子先生、長沼君主先生、野村恵造先生、スザン・ヤマダ先生、若有保彦先生、渡部良典先生に心から感謝申し上げます。最後に、修正の際に助言を頂いたヤスミン・ロメロさんに深く感謝致します。

## 注

- 1) 大学入試センター「平成20年度センター試験志願者数及び受験者数等」

Available: [http://www.dnc.ac.jp/center\\_exam/20exam/20shigan.html](http://www.dnc.ac.jp/center_exam/20exam/20shigan.html) [2008, 12月]

## 参考文献

- Baily, K. M. (1996). Working for washback: a review of the washback concept in language testing. *Language Testing* 13, pp.257-279.
- Cheng, L. & Curtis, A. (2003). Washback or backwash: A review of the impact of testing on teaching and learning. *Washback in Language Testing*. Mahwah: Lawrence Erlbaum Associates, Inc., Publishers. pp.3-17.
- Grabe, R. B., & Kaplan, W. (1996). *Theory & Practice of Writing*. London: Pearson

Education Limited.

Jacobs, H., Zinkgraf, S., Wormuth, D. R., Hartfiel, V. F, & Hughey, J. B. (1981).

*English Composition Program*. Rowley Mass: Newbury House Publishers Inc.

Watanabe, Y. (1996). Does grammar translation come from the entrance examination?

Preliminary findings from classroom-based research. *Language Testing*, 13,

pp.318-333.

旺文社 2007a. 『2008 年受験用全国大学入試問題正解英語(国公立大編)』 旺文社.

旺文社 2007b. 『2008 年受験用全国大学入試問題正解英語(私立大編)』 旺文社.